「マンガ、あるいは「見る」ことの近代」第６回（2015 年 7 月 25 日）

ストーリーマンガにおける「ナレーション」

I.　フキダシのないストーリーマンガ（森田直子）

【要旨】

本日の 2 人の発表では、マンガを「見る」ことが「物語として読める」ことにどうつながるかという観点と、マンガのさまざまな形を歴史的観点から考える（現在の日本のマンガの形式を相対化する）ことを念頭においた。森田の発表についての以下のまとめは、佐々木氏の発表や両発表後の質疑応答の内容も反映して作成したものである。

全体タイトルの「ナレーション」は、狭義には「キャプション」のことである。ただし、根源的には「ナレーション」を考えることはストーリーマンガの「語り」（絵、コマ、文字他による語りの行為）を考えることにつながっていく。

発表ではまず図式的に、「キャプション形式の（フキダシのない）マンガ」と 「フキダシのあるマンガ」を対置した（過渡的な形式として、キャプションとフキダシを併置するマンガもあることも見た）。しかしこの対比を、佐々木氏の発表にあった「口演モデル／演劇モデル」（物語論でいう「語る（叙述）」／「見せる（提示）」の対比に相当？）とともに考えるとき、キャプションのなかにも（人物の会話などの）提示的要素が、フキダシのなかにも（状況や心情の説明などの）叙述的要素があることが、発表後の討論を通して明らかになった。

発表では、ストーリーマンガの複数の起源をめぐるティエリ・スモルドレンの「ラベルからバルーンへ」の議論を基盤とした（Thierry Smolderen, *Naissances de la bande dessinée*, « Du label à la bulle », Bruxelles: Les Impressions nouvelles, 2009, pp.119-127.）。「ラベル（発話の銘文）」と「バルーン」は形態としては似ているが、中に書き込まれたことばの性質（物語との関係）は異なる。ラベルのある絵画や風刺画（一枚物、複数コマ）が直接「フキダシのあるストーリーマンガ」に移行したのではなく、1830 年代以降のストーリーマンガ初期作品（テプフェール、ドレ等の挿絵画家、ブッシュ、クリストフ、また 1930 年ごろまでのヨーロッパの子供向けマンガの多く）はキャプション形式を採用している。その要因として、ラベルとフキダシの性質の違い（Smolderen 2009）と、フキダシに対するヨーロッパでの文化的抵抗（Renonciat 2000; Lefèvre 2006）とがあった。なお、スモルドレンの主張に対する来聴者の関心が非常に高かったのが印象的だった。

具体的テクストとして、絵＋キャプションという旧来の形式を使って新しい話法を開拓したテプフェールの『ジャボ氏』(1835)の抜粋をとりあげ、仮にキャプションがフキダシであったらどのように印象が変わるか確認した。キャプション形式では、キャプションがジャボ氏の主観的な見方を、絵がジャボ氏の客観的状況を表しており、両者が反目しあうことでアイロニーが生まれる。一方、フキダシ形式ではジャボ氏以外の人物も実体感を増し、作品全体が軽快になるが、ジャボ氏をめぐる視点の二重性からくるアイロニーが失われる。次に『クレパン氏』(1837)　の抜粋をとりあげ、この作品ではキャプションが客観的状況を、絵がクレパン氏の主観的な見方を表

している（内的焦点化がなされている）ことがわかった。『ジャボ氏』では舞踏会（非現実的世界）の現実を見せることに絵が貢献、『クレパン氏』ではクレパン氏の悩み多き日常を主観的なフィルターをとおして見せることに絵が用いられている。しかしいずれの場合も、主人公の顔が大きく（表情を強調し戯画的に）描かれており、『ジャボ氏』の絵が客観的状況を示すとは言ってもジャボ氏だけは誇張して描いていることが分かる。また 2 作とも（上流社会の）しぐさをまねる・（洗練されない）しぐさを笑う人々を描く作品であることが、テプフェールの絵物語の表現システムをメタ的に示している。なぜなら、この 2 作に限らず彼の絵物語は、人物の表情やしぐさから物語の状況を読み取らせつつ、表情やしぐさの滑稽さで笑いをとるメディアだからだ。

テプフェールは既存の物語メディアの特徴を分析し、それとの関係で自分の絵物語のメリットを自覚していた。喜劇のように笑って突き放すだけでなく、悲劇のように感情移入するだけでなく、客観化と感情移入を行き来できるような複雑な物語装置を考案しようとしたと考えられる。

テプフェール以後のキャプション形式の作品では、格調高い（時に韻を踏んだ）キャプションとユーモラスな絵の組み合わせ、また判じ絵風の絵と謎解きの文章の組み合わせなど、キャプションと絵の関係がより静的である。「フキダシ」登場以前のストーリーマンガの最初期にあたるテプフェールは、キャプション形式をきわめて特異な方法で用いたことが確認できる。

形の上では「ラベル」を踏襲しつつ、物語の展開とより連動する形で発話を囲むようになったのがフキダシであった。アウトコールトによるフキダシの使用はよく知られるが、フキダシの出現に、蓄音機のような音声再生の技術革新はどれほど関与しているのだろうか、またフキダシの登場期もしくはその直前の 1890 年代に無文字マンガ（サイレントマンガ）が流行したことはどのように説明できるだろうか、といった疑問も残った。